



《 「トイレにまで監視カメラが入ってる精神病棟にいた」とFukase／ファンタジーが腐った世の中で／彼らがファンタジーを歌う理由とは／炎と森のカーニバルでブチ上げたこと／ファンタジーとは真逆の神聖かま／銀杏ボーイズ”の峯田／トイズファクトリーのバンドたち／ロックって何／ 》

神聖かまってちゃんとSEKAINO OWARI

——エンターテイメントがドキュメントを喰うとき

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、「SEKAINOOWARI」（セカイノオワリ）を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんとSEKAI NO OWARI

ーエンターテイメントがドキュメンタリーを喰うとき

ファンタジーが腐った世の中でファンタジーを歌う意義

「トイレにまで監視カメラが入ってる精神病棟にいた」

とFukaseは過去のインタビューで語っていた。アルバム「EARTH」を発売した後だろうか。まだ“SEKAI NO OWARI”が“世界の終わり”で、Fukaseが深瀬慧という表記だった。



彼らは、二〇〇七年にバンド結成。二〇一〇年二月にファーストシングル「幻の命」をタワーレコード限定でリリース。二〇一一年、トイズファクトリー〈ミスチルが代表格〉からメジャーデビューした。



彼らはしばしばファンタジーと評される。↓

彼らはしばしばファンタジーと評される。それはライブ演出はもちろん、曲や歌詞のなかでもみてとることができる。
なぜ彼らはバンドの命題であるロマンではなく、ファンタジーを歌うのか。

ロマンを歌うバンドは多い。↓

ロマンを歌うバンドは多い。というか、それがほとんどだろう。なぜなら、バンドは現実を想起させようというテロ集団だからだ。アイドルは非現実的なものとして存在しており、ファンタジーを市民に提供する。

「そんなもんじゃねえだろ？」と現実と突きつけるのがバンドだ。

例えば、“ミスターチルドレン”は《知らぬ間に築いてた自分らしさの檻の中でもがいてる／こんな不調和な生活の中でたまに情緒不安定になるだろう》と歌う。

“UNISON SQUARE GARDEN”は《何度よろけて／倒れたとしても／さっき立ってたんだし／立てないわけがないよ／光る聲は軽くなって》と歌う。

『バンプオブチキン』は《錆び付いた車輪 悲鳴を上げ／後ろから楽しそうな声 町はとて静か過ぎて》と歌う。

どのバンドも“SEKAI NO OWARI”と同じくトイズファクトリーである。

現実を想起させてロマンを歌うのがバンドだ。しかし↓

現実を想起させてロマンを歌うのがバンドだ。

しかし、彼ら“SEKAI NO OWARI”のようにファンタジーを歌い、体現するバンドは少ない。ファンタジーが腐った世の中でそれでもファンタジーを歌うことを選択した彼らは評価されるべきだろう。

彼らはそれを忍ばせるわけでもライブのMCで言うでもなく、徹底的にビジュアルとライブの演出で分かりやすくリスナーに提示していく。↓

彼らはそれを忍ばせるわけでもライブのMCで言うでもなく、徹底的にビジュアルとライブの演出で分かりやすくリスナーに提示していく。

二〇一三年に行われた野外ライブ『炎と森のカーニバル』で、マスメディアも大きく取り上げるほどのファンタジーをブチ上げた。↓

野外ライブ『炎と森のカーニバル』。空き地に三〇メートルの巨大な木のセットが建てられていて、その下にステージが組まれているのだ。さらに、それを森のように覆う木がある。とにかくでかい。

その巨大な木には電飾が組み込まれ、ウォータースクリーンというものの仕込まれているらしい。下からは炎が吹き上がり、何十ものレーザーが飛ぶ。なんだか無茶苦茶だ。

日本のロックフェスだってこんなにやらないのに。いや、日本のロックフェスだからやらないのだ。そして、“SEKAI NO OWARI”だからこれ出来るのだ。さらにいうと“SEKAI NO OWARI”しかこれは出来ないのだ。



かつて、“LUNA SEA”は一九九九年に↓

かつて、“LUNA SEA”は一九九九年に野外で一〇周年ライブ「LUNA SEA 10TH ANNIVERSERY GIG [NEVER SOLD OUT] CAPACITY∞」を行った。イベントタイトルのとおりチケット枚数に上限を設けなかった。その結果、総勢一〇万人を動員した日本初の超大型動員のワンマンライブだ。

このライブ、開催直前に台風が直撃した。

ステージセットが崩壊し、そのままセットを廃墟に見立ててライブが行われた今も語り継がれる伝説である。

ステージセットが崩壊しても“LUNA SEA”がライブを行えたのは彼らがロックバンドだったからだろう。

これが“SEKAI NO OWARI”だったらと考えると彼らはきっとライブを行わない。↓

これが“SEKAI NO OWARI”だったらと考えると彼らはきっとライブを行わない。こんなエピソードがある。

大みそかに放送された『第64回NHK紅白歌合戦』の出場者でSEKAI NO OWARIの名前が上がっていたそう。

内定情報まで報じられたにも関わらず出場に至らなかった背景には、紅白でも大掛かりなセットを組もうとして、NHKサイドと話がまとまらなかったという。サイゾーの記事なので真偽は分からないが。しかし、彼らのことを知っている者なら、そうなんだろうなあと思える。

自分たちの演出がとれないのなら紅白歌合戦の出場すらも断りそうなのが彼らだ。↓

さきほどの、『炎と森のカーニバル』に話を戻す。キーボードのSaoriはブログで、このイベントの総制作費は五億円と書いている。完全に赤字らしい。

かつて、浜崎あゆみは『fairyland』の数分間のPVで二億四千万円をかけて話題になったことがある。

音楽と直接関係ないものにそれだけのお金をかける意味があるのか疑問だったが、彼らSEKAI NO OWARIのイベントをみると演出にお金をかける意義が分かる気がする。これは彼らの覚悟なのだ。

赤字であるとかいう以前に、いま日本でバンドが五億円使って大赤字を抱えてでも↓

赤字であるとかいう以前に、いま日本でバンドが五億円使って大赤字を抱えてでもやりたいことをやるという、そういう無茶をだれがやろうというのか。

曲を作るときトラブルがあって苦悩があってという話はたくさんみるが、一五メートルの木に満足できなくて三〇メートルに作り直して、ウォータースクリーンと炎とレーザー使って5億円かけてしまったなんていう話は知らない。



現に、会場ではカメラや写メで会場やステージが↓

リスナーのことを考えているのは彼らのほうではないか。

現に、会場ではカメラや写メで会場やステージが取り放題という。

ライブが始まってメンバーが出てきも自由にステージの写真を撮っている。これも最近ほとんど聞いたことがない。海外では公然と行われているらしい。

マナーとか、ネタばれとか、肖像権とか、いろんな制約やルールがあって、会場内ましてやステージやメンバーの写真を撮るなんてもってのほかというのが当たり前前のルールの日本。

彼らのライブは自由なのである。記念写真にして友達に送ったり、ラインやツイッターやブログにアップしたりしていいのだ。

↓

ロックバンドは「みんな、自由にしてくれ」と掲げつつカメラがあることを許さない。

それを考えると、カメラを許していた“SEKAI NO OWARI”の方がずいぶん自由である。

現実とロマンを語ることによってリスナーの心を解放していこうとするロックバンドよりも、ファンタジー（幻想）を緻密に演出してその瞬間だけでも一二〇パーセント心を解放させる“SEKAI NO OWARI”の方にロマンがないだろうか。



圧倒的なエンターテインメントを現実世界にぶつけることが、↓

圧倒的なエンターテインメントを現実世界にぶつけることが、今の時代に戦いを挑む一番の戦闘方法な気がする。

例えば、二〇一四年に活動を再開した“銀杏ボーイズ”の峯田も最近のインタビューでそのようなことを語っている。

「エンターテインメントがドキュメントを食い潰すところを見せてやりたいと思った」「そのカタルシスをもう1回作り出したいんだ」「今はみんな裏側を見ようとするけど、そこに真実なんてない。真実は作品の奥にあるんだよ」といっていた。

“神聖かまってちゃん”は自身の姿を↓

“神聖かまってちゃん”は自身の姿をさらす、ネット配信を行うバンドだ。
ファンタジーとは真逆である。ネットにアップされ続けるその映像はドキュメンタリーといえる。



の子はときには爆笑したり、ときには号泣したり、ときにはメンバーと殴り合いのケンカを↓

の子はときには爆笑したり、ときには号泣したり、ときにはメンバーと殴り合いのケンカをノーカットでリスナーに届けるからだ。

“神聖かまってちゃん”の裏側は、バンドの裏側であり、人間の裏側でもある。そのドキュメンタリー性が彼らを物語として構築していく。



ドキュメンタリーは所詮ドキュメンタリーの粋を出ないと思われる。峯田のいうように、真正面からぶつかれば、エンターテインメントに負けてしまう。

しかし、“神聖かまってちゃん”を追っていくと、彼らの姿に心を打たれる。

奇跡が約束されないのがドキュメンタリーだが、彼らのそれはエンターテインメントに満ちていた。

千葉県のかつてひきこもりだった少年が↓

ドキュメンタリーは所詮ドキュメンタリーの粋を出ないと思われる。しかし、彼らのそれはエンターテイメントに満ちていた。

千葉県のかつてひきこもりだった少年がバンドを組み、ネット投票のサマソニ新人枠に実力派バンドを出し抜いて見事出場決定、NHK音楽番組になぜか出演、フェスで坂本龍一と肩を組む、アニサマに出演、ライブ中に殴り合い、『劇場版 神聖かまってちゃん ロックンロールは鳴り止まないっ』という入江監督の映画に出演、いまではきりーぱにゆぱにゆと焼肉へ行く仲に。

人生はこんなにもダイナミックで面白いものなのかとリスナーは感じたはずだ。



エンターテイメントはドキュメントを↓

人生はこんなにもダイナミックで面白いものなのかとリスナーは感じたはずだ。

エンターテインメントはドキュメントを食いつぶす力があるから価値がある。

しかし“神聖かまってちゃん”は、ドキュメンタリーはエンターテインメントであることを教えてくれた。くだらない現実を自分から変えていこうとすれば、エンターテインメントになるということだ。



“SEKAI NO OWARI” が↓

“SEKAI NO OWARI”が行うファンタジーもエンターテインメントである。でも“神聖かまってちゃん”はファンタジーには頼らず現実とロマンを歌って、自身のドキュメンタリーを積み上げることによってエンターテインメントの力を得たロックバンドだ。

一〇年代、そんなロックバンドが世界を塗りかえる光景をはやく見たい。←



うおお

神聖かまってちゃんとSEKAI NO OWARI
——エンターテイメントがドキュメントを喰うとき

<http://p.booklog.jp/book/85475>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ